

「橙」の音は「懲」なりや

——『文選』音注の原姿を求めて——

—

『文選』の注釋をめぐって、今日まで多くの研究がなされていることは周知の事柄であり、中國古典學に一つの研究上の峰をなしているといえる。しかしこの中でほとんど手のつけられていない部分がある。すなわち、ここで取り上げる『文選』での音注に關するものである。有力先行論文としては、かつて本誌に發表された松浦友久氏の二本を數えるのみである。⁽¹⁾ 兩論文とも「序」や「歸去來兮辭」といった限定された範圍で、李善音注や五臣音注の本來の姿の可能性を探る方法を採っている。この點こそ筆者にとって、たいへん示唆的であり、より廣い範圍に押し廣げて、さらに深い考察をすべきであると考ええる。そこで、今回筆者もまねて、司馬相如

「橙」の音は「懲」なりや（水谷）

「子虛賦」「上林賦」での一部音注について考察を加えてみたい。

『文選』所收の司馬相如「子虛賦」「上林賦」は、李善注の部分において郭璞注が用いられている。⁽²⁾ この點で、『漢書』顏師古注での司馬相如傳所收の「子虛賦」での注に郭璞注が部分的に引かれており、いわば共通項をなしている。試みに、音注の部分に限ってこの様子を少しばかり見てみよう。ちなみに利用したテキストは、『文選』（文と略す）は四部叢刊本であり、『漢書』（漢と略す）は中華書局排印本である。

水 谷 誠

姹 (漢) 師古曰「姹、音丑亞反」

(文) 善曰「張揖曰、丑亞切」

夢 (漢) 師古曰「夢讀如本字、又音莫風反……」

- 麟 (文) 善曰「夢、莫諷切」
 (漢) 師古曰「麟、音玄」
 輻 (文) 善曰「司馬彪曰、輻、音玄」
 (漢) 師古曰「輻、音如閔反」
 搢 (文) 善曰「輻、而緣切」
 (漢) 師古曰「搢、音一頓反」(師古注訓詁)
 (文) 善曰「搢、一損切」
 峴 (漢) 師古曰「郭璞曰、峴、音佛」
 (文) 善曰「郭璞曰、峴、音佛」
 峴 (漢) 師古曰「峴、音吟」
 (文) 「峴、音吟」(本文割り注)
 罷 (漢) 師古曰「郭璞曰、罷、音疲」
 (文) 「罷、音疲」(本文割り注)
 陂 (漢) 師古曰「郭璞曰、陂、音婆」
 (文) 「陂、音婆」(本文割り注)
 陲 (漢) 師古曰「郭璞曰、陲、音馳」
 (文) 「陲、音馳」(本文割り注)

以上、「子虛賦」の冒頭から引いてきたが、おおよその改變の仕方は上記例からわかるであろう。郭璞の音注に注目し

てみると、「善曰」で始まる細字雙行の注釋の中に収めるものや本文割り注の中に収めるものがあり、取り立てて法則があるように見えない。また、「搢」のように顔師古に由來するものを、顔師古注では去聲に、李善注では上聲に違えて讀んでいる。ただし、「峴」では、顔師古注・李善注とも用字まで同一である。「輻」では、李善注の方が顔師古注よりも詳しい。さらには、「輻」では、兩注で音が大きく異なり、李善注は郭璞や顔師古でない他の音義家から引いてきたものであることがわかる。

このように李善注は多く(郭璞注を含む形で)顔師古注に依存するかたちで音注を形成していることがわかる。その引用形態については、上記の例のみでは少なすぎるが、一定の法則はなさそうである。そこで、司馬相如「子虛賦」「上林賦」の全體について、上記調査を續行すれば、李善注での(郭璞注を含む形で)顔師古注の利用範圍が明確になるであろう。これはこれで意味のあることであるが、あまりに藝のない單純調査であり、非顔師古系の音注については何もわからないという結果をもたらすことになる。むしろ、『文選』音注の改變という面に注目すると、すぐにわかる顔師古系の改變よりも、よくわからない非顔師古系の音注がどのように改變さ

れたかということが、より重要であろう。たとえば五臣の音注はどれなのか、李善が自分で付けた音注はどれか、などの問題は、多くの困難を伴うが、それぞれの傾向性の一端でもとらえられれば、『文選』注の成立に關するこれまでの研究成果に資することになるであろう。本稿では、この目的に沿って少しでも本来の實像に迫ってみたい。

二

一の序において、いささか大言壯語を吐いたが、『文選』注に顔師古注というフィルターをかけて像を見ようするのはなく、別の文獻をフィルターにしてそこの像を見ようとするのである。基本的な方法は同じであるからして、藝があると威張れるものではないが、しかし、そこに今まで見られなかった像が結ぶとするならば、これはこれで一應の成果といえるであろう。それでは、その文獻とは何か、ということになる。それは『集韻』です、とここで述べたなら、あまりの唐突さに驚かれるであろう。關係ないではないか、そんな無關係なものをフィルターにしてそこの像をあだこうだといっても、趣味ならいざしらず、研究ということでは全く無意味である。こう斷言されるであろう。少し待っていただ

「橙」の音は「懲」なりや（水谷）

きたい。これには筆者なりの長い研究上の道のりがあつてものをいっているのである。ここでそのことについて、少しの説明をした上で判斷をしていただきたい。そこで次に、なぜ『集韻』が『文選』音注と關係があるのかについて、解説をすることにする。

筆者は、この『集韻』の研究に取りかかる前に『禮部韻略』の研究をしてきた。そして、『集韻』と『禮部韻略』は、いわば兄弟といえるような關係であつて、編者も同じ編纂時期も同じという閒柄にある。兩書の相違點は、いろいろあるが一口にいえば、大規模の『集韻』に對してコンパクトの『禮部韻略』という點にある。そこで、『禮部韻略』の研究を進めるに當たつて、『禮部韻略』のみを見て研究するよりも、『集韻』を視野に入れつつ研究を進める方が何かと有利な面がある。本稿と關連する事柄を例に取れば、『禮部韻略』の文字の注釋（以下、義注という）と『集韻』義注とは、一見すると表記法が異なっているため無關係のように見えるが、仔細に比較してみると、關連をもっていることがわかる。中には相補分布をなしているようなところもあつて、兩書のどちらかを研究する上でも、相互の比較が必要であることが痛感された。⁽⁴⁾

中國詩文論叢 第十九集

兩書義注の中で、とりわけ興味深かったのは、『文選』の扱いであった。『集韻』は、『文選』と明記したものを引くことが非常に少なく、たとえば上平微韻の「葩」に「幽通賦」と篇名を明記して『文選』から引くことなど例外に属する。もう一方の『禮部韻略』には『文選』が多く引かれている。百三十九例という数は、經書以外では『漢書』に次ぐ多さである。この兩書の相違點は、『集韻』が『文選』の書名を挙げないで訓詁を引くのに対して、『禮部韻略』が『文選』の書名を挙げて訓詁を引くというのにすぎないであろう。なぜなら、筆者のこれまでの研究から『集韻』と『禮部韻略』の義注には密接な關係があることがわかってのことからして、『集韻』には『文選』からの訓詁が相當多いことが豫想される。すなわち、文字數の少ない『禮部韻略』に『文選』が多く見られる以上、『集韻』ではさらに多く見られるに相違ない。以上の事柄が、まず第一の前提となって、『集韻』をひとつフィルターにして、『文選』の音注の様子を見てみよう。このような試みをする原因となっている。

しかし、これだけでは『文選』にいきなり向かうのはやはり唐突すぎる。もう少し筆者と同様に回り道をしていただきたい。實は、『集韻』が『廣韻』に比べて、約二萬七千もの

増字を行っている。この増字をどこからもってきたのか、というのが、次の筆者の關心事であった。可能性のあるもの、たとえば『經典釋文』『漢書』『史記』『玉篇』『文選』などいろいろな文獻を、調査してみた。華々しい成果をあげたところでも自慢できるものではないが、筆者なりにこれまでよくわかっていなかった事實を指摘することはできるであろうという自負ぐらいは持つことができた。この中で一番の成果といえるものに、『文選』の六臣注は、現在の形のものが『集韻』編纂以前にできていたということがわかることである。

○(文) 卷十二郭璞「江賦」榮(割り注)於營切 善曰、皆波浪回旋噴湧而起之貌。

(集) 下平・清韻・榮小韻(娟營切) 榮、榮潛、波浪湧起之貌。

○(文) 卷十二郭璞「江賦」善曰、『南越志』曰、……水母、東海曰蛇。……蛇音蜡、竝除嫁切。

(集) 去聲・禡韻・蛇小韻(除駕切) 蛇・蜡、蟲名。『南越志』曰、水母、東海曰蛇。

○(文) 卷十二郭璞「江賦」 蝮(割り注)於粉切、蝮(割り注)力頑切 善曰、蝮、(蛇)行貌。

(集) 上聲・隱韻・惛小韻(委隕切) 蝮、蝮蝮、蛇行貌。上聲・準韻・綸小韻(縷尹切) 蝮、蝮蝮、蛇行貌。

○(文) 卷十三宋玉「風賦」 壘、五臣作壘。音謳。翰曰、壘、沙堆也。

(集) 下平・侯韻・謳小韻 壘、聚沙。

○(文) 卷十三宋玉「風賦」 懣(割り注)徒寸(切) 良曰、懣、惡亂也。

(集) 去聲・恨韻・鈍小韻(徒困切) 懣、懣、懣、惡亂也。

以上、「江賦」「風賦」のみからの舉例であるが、『集韻』の音義が『文選』六臣注からの求められたものであることがわかる。たまたま、「江賦」が李善注で、「風賦」が五臣注というようになったが、『集韻』では李善・五臣の兩注を適宜引いている。本論の司馬相如の部分も、六臣注から引いたものであることがよくわかるが、この部分は後に論ずることからここでは「江賦」「風賦」から引いてみた。

「橙」の音は「懲」なりや(水谷)

この考察から、六臣注の成立下限が、『集韻』成立以前の寶元二年(一〇三九)以前ということになる。つまり、ここで六臣注成立の下限が設定されることと同時に、『集韻』が利用したテキストが六臣注本であることがわかる。だから、『集韻』をフィルターにすることによって、そこから得られる結果を考察してみることがあながち意味のないことはいきれなくなるであろう。本論では、『文選』に關係する信頼できるテキスト六臣注本と『集韻』を用いてさらに論を進めていきたい。

三

それでは『集韻』をどのように用いて『文選』音注(とりわけ司馬相如「子虛賦」「上林賦」での音注)を考察するのかを以下に述べてみたい。この『集韻』を利用するに当たって、A『漢書』顏師古注に見えないものを中心に考察してみたい。なぜなら、この兩賦での顏師古注は同李善注の根幹をなすものであり、李善注の範圍を確定でき、李善注を排除して考察できるからである。ただし、この點を音注にまで及ぼし得るか否かについては豫斷を持たずに考えてみたい。一步退いてみて、郭璞音注・顏師古音注等を混ぜてしまう可能性はな

くなる。さらに、B『廣韻』（澤存堂本）にあるものや『說文』（大徐本）に引く音注と一致するものについても除外して考察してみたい。『廣韻』『說文』等と一致するものについては、『文選』音注を來源とするものといえないからである。このA・Bの二除外規定を基に『集韻』に見える『文選』音注は以下の通りになる。

①陼 (文)羊爾切(割り注)・向曰、陼靡、邪長貌。

(集)上聲・紙韻・演爾切 邪貌。

(胡本)司馬彪曰、陼靡、邪靡貌。善曰、弋爾切。

②績 (文)音績(割り注)・良曰、襞績褰縗、縫綴貌。

(集)入聲・昔韻・資昔切 襞績、衣閒蹶也。

(胡本)釋音なし。

③怕 (文)蒲各切(割り注)・五臣本作泊。善曰、怕與泊同。

(集)入聲・鐸韻・白各切 憺怕、靜也。

(胡本)『廣雅』曰、憺怕、靜也。善曰、怕與泊同。蒲各切。

④湃 (文)蒲拜反。銑曰、水聲也。

(集)去聲・怪韻・步拜切 水聲也。

(胡本)蒲拜切。司馬彪曰、澎湃、波相戾也。

⑤湃 (文)浦宏切(割り注)・銑曰、滂漚沆漚、緩流貌。

(集)下平・庚韻・披庚切 滂漚、水貌。

(胡本)司馬彪曰、滂漚、水聲也。匹享切。

⑥萎 (文)五臣音萎(割り注)・善曰、張揖曰、摧萎、高貌。⁽⁵⁾

(集)上聲・紙韻・鄔毀切 摧萎、山高貌。

(胡本)卒鄙切。

⑦嶮 (文)力水切(割り注)・翰曰、皆山勢高峻長遠之貌。

(集)上聲・紙韻・魯水切 山貌。

(胡本)音壘。

⑧橙 (文)音懲(割り注)⁽⁶⁾

(集)下平・蒸韻・持陵切 橘屬。(この小韻に持字は

ない)

(胡本)韋昭曰、持音懲。(胡本作持。この部分は顏師

古注にない)

⑨玢 (文)音紛(割り注)・善曰、郭璞曰、玢幽、文理貌。

(集)上平・文韻・敷文切 玉玢幽、文理貌。

(胡本)音紛。

⑩傑 (文)音差(割り注)・善曰、張揖曰、傑池、參差也。

(集)上平・支韻・又宜切 柴池、參差也。

(胡本)音差。

⑪儂 (文)音襄(割り注)・良曰、儂伴、遊貌。

(集)下平・陽韻・思將切 逍遙也。(儂に作る)

(胡本)(襄羊に作る。釋音なし)

以上の十一例を『文選』司馬相如「子虛賦」「上林賦」より得ることができた。いずれも、『廣韻』等には見えず、『集韻』に見えるものばかりである。これらのすべてが『文選』「子虛賦」「上林賦」から得られたものであるか否かについては、廣く他の資料を見た上で判断すべきであるが、『集韻』で初めて収められた特殊な音であることを考慮するとその蓋然性は高いといえよう。

そこでこの十一例をどの注釋書から引いてきたものかを検討してみると、「①陟」は李善注と良く合う。「②積」は五臣注のようであるが、『集韻』義注からすると他の注釋家からの可能性も高い。「③怕」は李善注である。「④泝」は五臣注である。ただし、反切に「反」を使っているところからすると、蕭該等のさらに古い注釋から來たものの可能性もある。「⑤泝」は五臣注のようであるが、『集韻』義注からすると他の注釋家からの可能性もある。「⑥崐」は音は五臣、訓詁は李善である。六臣注本を使った論據をこのような所からも示

「橙」の音は「懲」なりや(水谷)

すことができる。「⑦嶲」は五臣注のようであるが、他からの可能性もある。「⑧橙」については、後で論ずることにしたい。「⑨玢」「⑩傑」は李善注から、ただし現行の顏師古注の缺損部分である可能性もある。「⑪儂」は、李善・五臣以外の注釋家からのものである可能性が高い。むしろそれよりも、現行本で「儂伴」に作るのは誤りで、『集韻』のように「儂伴」に作るべきであろう。文字の構成要素の偏から見てもその方が妥當である。

「⑧橙」を除いて、ある程度の振り分けを、『集韻』の音義を基にしてできることが確認できるであろう。ただし、この點も李善・五臣レベルまでで蕭該・曹憲といったより古い層にまで入ることはできないことも確認できた。總じていえば、李善が①③⑨⑩、五臣が②⑤⑥⑦、その他が④⑪となる。

では、「⑧橙」はどのように分類できるであろうか。この「音懲」の次に見える「橙」には「直庚切」の釋音が付いている。テキストによって「⑧橙」の六臣本と「持」の漢書注本・胡刻本とに分けて考えることが必要であろう。さらに、釋音の面から、「橙」に「音懲」を付けた六臣本と「持」に「音懲」を付けた胡刻本とに分けて考えることも必要な手續きであろう。本文では香草のことが述べられているので、義

注「橘屬」が落ち着きが悪いが『集韻』に收められている「持陵切」の「橙」についても忘れることはできない。

まず指摘しておくべき点として、胡刻本の「韋昭曰、持音懲」が『漢書』顔師古注に見えないことである。他の部分は同文であることから、後に付け加えられたものの可能性がある。しかも、韋昭などと權威めかしているところと「音懲」の「持」が他に見えないところ、そして『集韻』では「橙」に作るどころから、胡刻本のケースは排除して良いであろう。この胡刻本が問題にならないとなると、「橙」に「音懲」と付けたのはどの注釋家かという問題を解くことは一面では容易になる。

というのは、庚韻と蒸韻とを混用した新しい時代の釋音であると結論できるからである。少なくとも五臣よりも後のものである。なぜなら「⑧橙」のすぐ後の「黃甘橙」の「橙」に付けられた釋音は、顔師古注から見て五臣注のものと思われるからである。五臣注で庚韻と蒸韻のあきらかな混用はない。六臣注本が編まれた時、諸音義を利用した際により後のものまで利用したのであろうか。ともかく典據を抹消した『文選』音注の不純さを見せつけられるようである。この「⑧橙」において『集韻』を持ち出さなくても、同じ結論に

到るであろう。が、『文選』のこの用例を見て『集韻』という字書作りの（つまり最大の韻書作りの）精神を、我々は古典資料としてより有効に生かさなければならぬであろう。それは、「⑧橙」以外の①から⑩のケースで容易に理解できるであろう。

四

以上のように『集韻』に關連づけて『文選』音注を見てきた。そこからは、『集韻』での義注訓詁例とも關連づけて音注の層をある程度辨別することができた。同じように楊雄や班固の賦についてもできると思われる。このような成果をもとに一部李善注の復元も試みることも可能であろう。

また、今回同様の手法を使って『文選』音注から『集韻』への繰り入れの様子を見てみると、六臣注本と胡刻本とでは、卷一の張衡「西京賦」から卷九潘岳「射雉賦」までの反切用字が異なっている。⁽¹⁾以下の部分では同じになることから、なぜ卷一の途中から卷九の途中まで反切用字が異なるのか、當然注目して良いであろう。假にこの部分だけでも李善單注本が残っていたと考えることも可能であろう。その場合、「⑧橙」をどのように考えるのか、もう一度再考することも必要

になるのである。

ともかく『集韻』を利用することによって、『文選』音注に對していくつかの問題點を指摘することができた。ここでの指摘に對して、『文選』を專攻する多くの研究者の見解を示していただけたら幸いである。私の投げかけたスポットがどのような意味を持つのかを有効にするためにであるからである。

(付記) 本年五月より八月末まで、中國、北京大學にて研修をしていた。三ヶ月の短期であるため、日本からは何の研究材料も持参せず、歸國後一週間であわてて書き上げたため、多くの不備があるであろう。本來は、第四節に述べた反切用字の不一致について論究するつもりであったが、時間的に無理であった。最後に、本稿のテーマは、國學院大學大學院古谷徹氏との雑談の中から得られたものである。ここに記してお禮のことばとしたい。

注

- (1) 「李善音注「趨、避聲也」「歸去來兮辭」の修辭效果に關する一考察」(一九九五年一〇月『中國詩文論叢』一四)、「李善注本「文選序」の音注について「加注者」の検討と「別、入聲」の解釋」(一九九七年一〇月『中國詩文論叢』)

「橙」の音は「懲」なりや(水谷)

一六

- (2) 以下に見るように「漢書」顏師古注を使っているが、ここは胡刻本の記載にしたがってこのようにいう。

- (3) 四部叢刊本では、「鼎」を「鼎」に誤る。

- (4) 拙稿『附釋文互註禮部韻略』義注より見た『集韻』義注[二九九六年十二月『中國文學研究』一二]

- (5) 「向日、摧嶮、……嶮貌。」五臣注では、訓詁が合わない。

- (6) 底本、木偏を手偏に誤る。この部分を「橙」に作るテキストについては、次の『漢書』顏師古注に據ってわかる。「今俗流書本持字或作橙、非也。後人妄改耳。」

- (7) 以下、例を示す。上が六臣注本、下が胡刻本である。

秘	蒲結切・房結切	張衡「西京賦」
廬	側家切・子加切	張衡「西京賦」
辟	浦覓切・敷赤切	張衡「西京賦」
柙	音甲・智甲切	張衡「南都賦」
澹	音蓬・蒲工切	左思「吳都賦」
倨	子讐切・子軟切	左思「魏都賦」
咲	音迭・余日切	楊雄「甘泉賦」
粹	七遂切・七悴切	潘岳「藉田賦」
閏	敕廉切・丑占切	潘岳「射雉賦」

以上、一部をここに挙げた。